

## 『筑紫道草』を読む

板 坂 耀 子

(昭和六十二年七月二日 受理)

### 一

広島県三原市立図書館に所蔵されている写本四冊の紀行文『筑紫道草』を紹介したい。

書誌についてまず述べよう。写本四巻四冊。表紙は茶(太)と白の格子模様。二三・八厘×一七・〇厘。左肩に茶色の題簽、ただし第一冊のみは後補で白色である。外題・内題ともに「筑紫道草」。九行書。丁数は第一冊三二、第二冊三九、第三冊四〇、第四冊四三。「玉井旧蔵」「桜山文庫蔵書」の朱印を有する。絵図が二葉、一葉は彩色(長崎来港のロシア人の軍装を描いたもの)である。文政十二年の作者林英存の自跋を有する。

作者については不明である。手がかりとなるものとしては本文中に、僕と永屋子は肥後路と志し(八月廿八日・柳川)

去ル年某官浪花の役に随従し、幸丁長田作兵衛(加嶋屋作兵衛。肥後公の御蔵元)別荘に到りしに(八月廿九日・新町)

此冬僕浪花え上り、聞探るに(同)

去ル比、同郷佃子の長男、故有て遍歴し、筑紫路にも所々周流し僕よ

り日を経て帰家せり。或時、旅日のはなしに(九月朔日・熊本)  
同行も多くはゆかされども、永屋子は主と伴ひ出ぬ。(九月十七日・宇佐)

拙と綱子ハ玖波え越し、未ダ日は高けれども(九月廿五日・玖波)  
などの記述があり、また、自跋及びその追加には、

此西遊や、家君、年月太宰府え宿願の事まします報賽のため、予に代参を命じ玉ひ、「折から崎陽の方一見し帰るべし。それ、勢廟・京・摂に遊ぶ人、十が八九にして、西遊の輩一二なり。後年官事あらバ、東遊は不期して得ぬべし。慎て羈旅堅固なれ」と、姑息の愛を割、壮志の慈訓を示し玉ふといへども、其旅日にありてハ、哀愁苦念し玉ひぬる、計りしりがたし。されども、斯有難き旅衣、道すがらの事ども日記して、家に帰るの日、是を土宜とし奉り、往日苦心し玉ふ十が一ばかりをも慰養し奉ると、こゝろ筑紫の道草と題して奉りぬ。

林 英存 圖

追加

今とし文政十二己丑立回る春の頃、僕東都より疾に侵され、家に帰、夏を経、秋に渡りて打臥しぬ。つれ／＼のまゝ此草紙を閲し、指を屈

むれば、其折からハ僕二十二にして、今廿とせ餘り六としを過せり。星移り物換り行まゝに、家大人の世を辞し玉ふよりも既に十年の佗しき秋を送り、西遊同行四人の人々も俱になく成て、纔に此草紙のミぞ、昔を問ふよしと成ぬ。拙き筆の営みながらも不朽に残るものとは、文でふならでなし。昨日ハ少年、今白頭の霜を戴く僕奴と成、犬馬の齡ひ五旬に近く、知命の期に及べども、不才にして業に進むことを得ず、ましてや病衰日を送りぬ。嗚呼、時の失ひ易く宿志追ふべからず。竊に頼らくは、我兒輩の成立して志を継ん事を。長に少に字を慣ひ、道理を問ひ弁へ、たま〜此草紙を読もし、僕が拙陋を恥、悔を潔ぎなんハ、兒達の孝儀にして僕が素懷を慰するもの也。先書、竈魚のために厄せられつれば、旧のまゝを清書し、同じく四冊とし、みづから緘綴して書棚の隅え納め措けるも、後來僕が兒達に望む事のあるよしハ、おのづから知玉へかし。

とある。これによると、同行者は四人で、「永屋」「綱」等の名が文中に見える。また、跋文とその追加によれば、作者がこの旅行をしたのは文化元年、二十二才の折であり、その時に記した紀行を、二十六年後の文政十二年に写し直したのである。その十年以前に父が死に、同行者もすべて歿している。

これらのことから、作者の出自を知ることではできぬかと、広島市立図書館の浅野家文書あるいは「藝藩輯要」所収の藩士名鑑等を調べた。記述から見て、作者が広島藩の藩士であることはたしかと考えたからである。しかし広島市に残る近世関係の資料は少なく、名鑑中に林家というのはいくつか存するが、該当する人物は見出し得なかった。

ただ、この紀行文は、泊まった宿屋と、昼食をとった場所を必ず記すという面白い特徴がある。したがって、今後、宿泊地の方で資料が発見

される可能性もある。以後の課題としたい。

題名と跋文からも察せられるように、これは父に代って太宰府にお礼参りに行った若者が、九州の主として北部を見聞し、父への土産、みやげがわりとしてしたためたものを、二十数年後の父の死後、本人の記述によれば、「病んで、特になすこともなく終わろうとしている自分の生涯」の一つの形見として、子どもたちが後に読むことを期待して清書し直したものである。近世の紀行文の多くは、旅先からのみやげがわりと、自らの老後の思い出のためと称して記される。これもまた、そうであつたのであろう。

近世の九州関係の紀行文は多数にのぼる。その中で殊更にこの『筑紫道草』をとりあげるのは、この作品が種々の意味で近世紀行の特徴をよくそなえた、読物としても面白い、すぐれた作品であると考えからである。

## 二

この紀行の目的は、もともと太宰府詣であるから、四巻四冊の写本のうち、第一冊の後半と第二冊の冒頭は、太宰府天満宮の詳しい記事で占められている。折から天満宮祭であつたため、作者は次のような、臨場感にあふれる描写を行なっている。

同夜五鼓、御宮遷の神事こそ壯觀の至也。浮殿より神輿を本社え還座なし奉る也。刻限に及て相図の鐘鼓に、以前の社家供僧の銘々、提燈大小無数、前後に随へ隊伍をなし出張せり。銀河の星は数丁の外に光を薰じ、百萬の螢火は宝池に乱入せりと、恰も不夜城の思ひをなせば、還行の時とぞ告ぬ。すでに神輿、浮殿を下せ玉へば、御背後に随て音楽の声は虚空に起り、和光の影は神鏡に輝き、三ツの橋を渡らせ

玉ひ、桜馬場の傍には、衛士の炬火<sup>たぐひ</sup>は天を蒸し、照さぬ隈もなし。楼門を入り玉へば忽ち門扉を開て、群参の狼藉を制逗す。神前に還御なし奉りてハ、検校房、勾当房、満松院の三子執事し、堂下にハ牀几を構へ六房三公これに列位す。次で福岡・久留米両候<sup>めつけやくもと</sup>よりの警吏隊子を引卒し同所に出張せり。其余、社人、群会の族、立つらなりて立錫の地も置ず。喧声湧が如く、萬夫の狼藉は制しかねてぞ見ゆ。乍去、神威を下り數萬の點燈は岩戸の外に退けて、堂上堂下一星の光もなく、真暗<sup>とこやみ</sup>の世と成しかと怪しむ折節、夜陰の涼氣凛々<sup>りんりん</sup>としてハ人なきが如く、無声音を伝へ、頻に一陣の嶺松<sup>みづのまつ</sup>颯<sup>さつ</sup>と告来り、心耳を澄しむるに、宮徵稍次第を追て初て還城樂を奏せり。宿穢一時に散じ、人の心をして幽明の神徳に感ぜしめ、ふたゝび越殿樂にいたりてハ、歡喜微妙の思ひを増ぬ。此時、既に神靈を社壇へ遷し奉り髣髴<sup>ほうふつ</sup>と一星を捧げ、萬點次第に上りてハ、和光の御影は岩戸の外に薰じ、人の面しろく、と歡喜の声止ことなし。

当時の太宰府が栄えていた様子は、今の国道三号線にあたる海への道を、博多へ向う作者たちが、箱崎をすぎたあたりから、此あたりよりは宰府詣の輩ますく多く、駅路甚賑ひぬ。すでに松原を数丁至つくせば博多也。

と、道が次第に混雑してくる様子からでも、うかがい知れよう。その他、宿房の様子なども細述してあって、太宰府関係の資料としても貴重なものであろうと思う。

しかし、父にも言われたとおり、作者は太宰府参りをきっかけに、九州各地、とりわけ崎陽(長崎)の方を遊覧しようというのである。そして、記事の分量あるいは内容から見ても、この紀行文の中心は、太宰府より長崎の方にあるようである。写本四冊の内、第三冊はすべて長崎に

関する記事で、第四冊の冒頭にまで、くいこんでいる。

長崎の町の様子、紅毛人や南京人の生活など、記事の内容は多彩にわたる。一部を次に抜粋して、解説したい。

紅毛は、余国にすぐれ技芸に長じ、国の風俗にてあらたに物をたくみ出し、細工ものなど奇妙不測の効をあらはす。是もかならず一人工夫にあらず、親は子に伝へ、子孫<sup>とそめね</sup>迄も伝授し、数代を経て造作するよし。千里鏡を作りてハ天を近く窺ひ、大船を造り世界を歴廻り、宇宙の中間に跋渉することハ、万国の及ざる業也。近来編出せる地球の図あるよし、甚細密にして古来なき所なり。數十人の才智を以て地域を研窮したるものと云。寛政の比、東都芝門司馬江漢の製したる世界の図有。紅毛人造れるを写し、銅板に上すと云。この類にや。日本銅板の創製<sup>はじめ</sup>也。これを借て見しに、その細密奇妙也。此図によりて見しは、阿蘭陀本国は日本とは殊に隔り、又新阿蘭陀と云地有。シャガタロと云。東海え船を出すとしるせり。日本より南西にあつて、図面にて稍近く、阿蘭陀の近きにイギリスト云都会<sup>と</sup>有て、奇品あまた出る所也と記せり。これら迂遠のはなしにて、管見のしるべきにあらず。たゞ図面に見し荒増を覚て、癡人の夢を説と同じかるべし。唐船の来る南京は、余程近きにや。

五日夕、遠見番所より告来ハ、遙沖に雲か船かと怪しく一塊の見ゆれども、多くハ船と注進せしかば、市中人機何となく躁々敷、時刻を追て注進絶間なく、六日午後におよんで熾熾が沖へ碇を下し、始てヲロシャ船といひ伝ぬ。それより神の鳴え入来り、官船日夜往来あつて市中いろくの取沙汰にて、家々おりやわぬ気色也。

市家すべて花美に走り、凡の人、平生衣服調度等も他方より僑奢に扱ひ、諸事華美を表とする風俗は、古来より異国人来船の地なれば、我朝を飾る気の張より出る事成べし。列国の封界の人さへ多くは己くが国所の最良々小人の小さいかひはまゝある事なり。まして異邦への外聞とおもへるは、人情の止むことを得ざる所也。素より異船の渡来により、利益の儲も有、繁昌の土地ゆへ、業も叶へるに寄べし。官よりも、他所とはかハリ課役も免され、一歳のうちにハ御合力銀等も下るよし。唐物問屋、唐物の御拂ひの節入札し、其代銀三ヶ月ハ御ゆるめ有て上納せるよし。

八日、すでにおろしや船、港近く御引入有しとて、官船引もきらず往通ぬ。扱市中にハ、翌日は諏訪の祭礼にて、例ながら殊更に賑ひ、丁々にはその仕構鬧しく、然るに今年は思ひ設けぬおろしやの来船、「これは稀代の事也。いざ船どめなきうちに見物せん」と、我レ人、船を買雇ひ、或は官船にとられしかば、船と名の附たるハ皆人の手え渡れり。我輩も「かゝる折に來しこそ幸なれ。何ともして至り見む」とて、旅亭をいらちて責めければ、やうく屋形もなき小舟を尋出し、水子さへもなく、旅亭の櫓を取すべもしりたれば、「さらば」とて、宅簀諸ともに連立て乗移。すこし漕出れば、俄に驟雨の降來しにぞ心を悩し、しばらく南京船の舳に雨宿せしに、やゝ雨の防ぎと成こそ、流石大船の蔭としられたり。一通りふる村時雨、早くも晴渡り、雨後の山く一入詠を添てカウサキの御番所を過。所々の御陣場には材木を持運び、或は幕を打、旗幟等もみゑ、いづれ仕構のやうす也。御番所と少し隔り、相対て割る如き岩山有。船留には此岩え鉄鎖を掛渡さるよし。此辺すべて曲くには発貢御備相見へ、猶漕廻れば、唐

船の荷積をすまし港の外に碇を下し、赤旗の翻マとして五両の風を伺えり。(略)かく漕行て、おろしや船ちかく至り見れば、御奉行所並諸手の番船、前後に廻繞す。肥前家の席船九艘、おのく鯨船一二宛從へ、弓鉄鎗鉾は夕日にかゝやき、嚴重なる気色也。当地にても肥前公、此度の御手当の速に都合せる事、第一の御評判也。扱おろしや船は蘭船と大同小異にて、魔威と唱るもの、彫刻尋常ならず。今年の紅毛船よりハ一等大なるべし。おろしや人は蘭人にかかわらずと見へし。委く気を附くるときは異風有よし、当市の者はいへり。クロス、マタロスなどハ来らずと云。蘭人、赤人、共に肉食を専になす故歟、顔目、白色、日本人とハかわれり。又、船ちかくよりてハ、臭氣屠市に入るより甚し。おもふに船中、飲食の折にぞ有し。御番船多く取廻し居ければ、強てハ近寄がたしむ。一方ハやゝゆるめてありけり。とかうするうち時移りぬれば、もとのかたえ漕戻し、蘭船などくわしく見物し、日暮まで夷猶し、燭を奉て旅家へ帰りぬ。

当市は往古々旅人御しらべ厳く、行券を改め国所を糺し、旅主より逗留の日数を訴へ、市長より旅客を会所へ呼出し、何角問ひ改ることなり。素り無頼の輩には一宿だにも許さず。他方と同じ心得にて入込てハ、まゝ難儀するよし、かねても聞伝ければ、我儕ハ銘々縁をもとめ、其手組十分にて、却て何れと決定せざりしに、宿因の有てや、旅の道づれより安太郎の世話にかゝり、何事も心遣ひなく逗留せしは、奇遇と云もの成べし。

拙稿「九州紀行小考」において、長崎は、古来の名所であり九州の象徴であつた太宰府に代わつて、近世に新しく登場した、大きな魅力を持つ

名所であり、近世九州紀行の一つの中心であるとともに、それは、鎖国の時代にあつて、北方の蝦夷地と同様、世界につながり、日本というものについて改めて考えさせる刺激を与える土地として、紀行文学に鋭い影響を与えていることを指摘した。作者林英存の、これらの記述にもそれはあらわれている。司馬江漢の製した、紅毛人の地図の写しを見て、作者は世界に思いをはせる。また長崎市中の華やかさを、他国にひけをとるまいとする「我朝を飾る気の張」という一種の愛国心から出たものと分析し、容認する。それを、日本国内の各地方の対立と比して説明している。この分析の当否を今は問わない。おそらく作者の英存自身がそういう「気の張」を感じさせられる、ある興奮が、長崎という町には當時ただよっていたのであろう。また、異国と日本との関係の理解に、国内の各地方の対決を例にひくのも、近世における紀行文作者たちの、地方を見る目と異国を見る目が、重なりあつてゆくのを示すようである。<sup>註2</sup>

折から長崎は諏訪祭の準備でごったがえしている。その中に、沖の方から雲か船かと怪まれる大きな影が入って来る。ロシア船である。日本との交易を求めて訪れたこの船は沖にとめられ、公の船がしきりに行き来し、町の人々も見物に行こうとする。作者もまた、「かゝる折に来しこそ幸なれ。何ともして至り見ん」と、宿の人々とともに、小舟で海にのり出して、ロシア船のそばまで接近するのである。

この紀行全体の一つの圧巻であるとともに、日露交渉史上の貴重な資料でもある。これは「一七九九年、ロシア皇帝パーヴェル一世はイギリス東印度会社に倣つて北アメリカと北西太平洋の植民地経営を独占させる露米会社を設け、総支配人に大株主のレザノフを任命した。皇帝アレキサンドル一世らロシア政府高官多数が大株主の露米商会の利益を増大させる対日通商実現のため、レザノフが第二回遣日使節に任命され、

文化元年（一八〇四）九月、その艦隊は長崎に現れた。レザノフは幕府からラックスマンに与えられた信牌と將軍宛皇帝親書を長崎奉行に提出したが、翌年三月、通商要求は完全に拒絶された。露米商会総支配人レザノフの失望は大きく、彼は同社社員で海軍士官のスボストフ大尉らに蝦夷地沿岸の日本の施設攻撃を示唆し、帰国した。」（海保領夫「近世の北海道」）「レザノフは、一八〇四年の九月二十七日——日本暦の文化元年九月六日に長崎に着いて、オランダ語の書面を長崎奉行に提出した。ラックスマンの松前で与えられた信牌が、この鎖された国の扉を開く鍵になることを確信していた。奉行肥田豊後守頼常、成瀬因幡守正定は、ただちに江戸へ急使を出し、その許可を待つて上陸と接見を許したが、幕府から出向いた応接使遠山金四郎の回答は、あらためての『国法』による拒絶であつた。ロシア皇帝アレキサンドル一世からの国書も贈り物も受けない頑固さである。」（吉田武三「北方史入門」<sup>註4</sup>）などと記される、有名な訪来であつた。作者は他にもロシアに関する通詞たちの手紙などを、多く書写して紹介しており、これらの資料的価値も、今後検討されねばなるまい。

それらの資料の紹介も含めて、この紀行文の、長崎に関する部分は、必ずしも記事が十分に整理されているとは言えず、時に雑然とした印象も与える。だが、それがまたかえつて、作者のあくことのない好奇心と、積極的な行動力をうかがわせ、長崎という町が当時持っていた多様で激しい魅力と、全力でそれを吸収しようとした一人の若者の息吹を感じさせるようである。

### 三

先述した如く、このような長崎は、近世になって初めて登場する新し

い名所である。したがって、中世の紀行類、たとえば宗祇の「筑紫道記」(文明十二)や細川幽斎の「九州道の記」(大正十五)には、当然登場して来ない。たとえば東海道の紀行においては「海道記」「東関紀行」といった古い紀行が、近世に入ってからかなり引用されるのに、同様のことが、たとえば宗祇の「筑紫道記」が近世の九州紀行に引かれることがあまりないのも、それが一因をなすのかもしれない。

『筑紫道草』も、宗祇や幽斎の紀行は全く引用していない。かわりに大変よく読んで、参考に行っているかに見えるのが、この少し前に出版されて、近世の紀行文を讀物として完成させたといつていい、橘南谿の「西遊記」である。

こゝに武陵の昔、秦の苛政を避しに、其趣は似たることあり。日の本にて誰かは聞知らざるべき。(略)足利の末にや、太閤の御代にや当りけん、何れの川筋なりしや、河上より梶の流れ来れるを、怪しミ見附て此山奥に人の住けるやと、始て尋ね出せしと也。元和寛永の比、公儀へも事のよし聞上られ、肥後の支配と成し玉ふよし、西遊記に記せしかども、これも肥後城下の聞書にて現に見しにはあらず。(九月朔日・熊本)

又、天明の比、巖窟の傍々檜垣の女形自作と云石像出しを摹写して此あたりに流布せり。西遊記に委く見ければ略す。(九月二日・岩戸山観音)

筑紫のしらぬ火といふ、こゝの海にて七月晦日の夜、此あたり近き沖に数万の火いつる也。西遊記に委くしるせり。(九月三日・嶋原)  
西遊記に云。諸葛孔明、南蛮の孟獲を攻し時の陣太鼓を炭取にして用ひたりしを、漢土より図を以て尋来しに初めて心得て深く珍藏せしと云。此吉雄家成よし。(九月九日・長崎)

西遊記にも誌せしハ、十年前までハ繁昌他に越しが、近ふおとろへ入浴の族も武尾には落るよし。(九月十一日・嬉野)

明確に書名を記すのはここにあげた部分であるが、その他にも影響をうけたり、意識していると思われる部分が存する。(他には「筑前国統風土記」を引用している部分があり、こういった作品の記述がおそらく、『筑紫道草』の創作姿勢や文体の、基礎を作ったものであろう。)

たとえば、作者はしばしば次のように、項をあらため、話をまとめるようにして、長い記述を行うことがある。

筑前領は檀名産と聞しに、いかにも堤又は山圃など多く檀を作り、又驛道など松原長くつゞけり。中にも生の松原、千代の松原など筍崎辺の景地は全国にも稀なるべし。筑後は檀も植けれども前領とは劣り、松原少く杉林多く見ゆ。

前州は民俗温和にて、言語もさまで賤しからず、食物・土地も事足れり。後領に移りてハ土品大に減じ、人物言葉とも一段賤しく覚ゆ。婦女の結髪風俗はいづれとも質朴、古めきて見ゆ。同遊の年長いへるは、「以前のお茶台と云首なり」と、そゞろに不骨を語りぬ。

前州、宰府詣ふでに、まゝ、艶妹の婦人をも目送せしに、人物はよく、福岡の士家の宅簀と見へ、打連く〳〵到れる中に、男子の衣服よりハ婦女の着服を減せるは此国の一風也。これは全く制度の有て、陰は陽に克しめすとの官方の掟成よし。又、阿娘の単物、多くハ黒く、模様また古めけれ。猶西えいたりてハ、男子の言葉ハ通じやすけれども婦女の言語は聞兼るも多し。既に此宿の女房僕が浴湯へ入らんとしける折しも、火ばかしをなにかいひしを、浴桶のことに聞まどふて答しかば、相互に通ぜずして双方たゞ笑ひを催しぬ。能く辨へければ、ヒラメの焼たるを夜喰に用んとのこと也。すべて魚など灸レルを火ばか

すと云。聞へたる言葉なれど、きゝなれず其音声の響もかわるゆへ聞兼ること多し。(八月廿八日・半の町)

これは、筑前と筑後の比較論で、他よりも一段と行頭を下げて記してある。更に、次のような場合には、明確に一項目をたてる。

#### 舟中物語

此日は殊さらに秋の日の爽かに心に春く浪風もなし。いぎ四方の詠を筆に留んと、そこらあたりの問たづね、水子どの、櫓拍子にのり、嶋原の昔がたりも聞まほし。(略) 此千把山頼れけるハ、今は十三回の昔語になりぬ。抑此山そのとし三月朔日より、日夜震動やむ時なく、四月に馴、忽ち抜出けり。其雷震ハ恰も天柱かけ地維裂るかと近国を轟じ、数里を去て棚中の器皿これに雷同し、山は海面ニ漬て八十余嶋と成り、今の小島多き、是也。此動キ海水を壓し、海若と成て近郷を呑食し、各地に失ふ人種は干を以てかぞふべく、嶋原の城市ハやうく十が一を残し、横死の者骸を積て丘をなし、今、千人墳と云る、七ヶ所に有よし。まことに未曾有の変怪にて、日の本に隠なく、舌を振ひ身の慄立しことハリ也。今に其荒類ことくくに鰲足芦灰を補ざれば、なまじいに此地に見聞し、腹あしく成思ひこそしにけり。されば此時の冤魂、いまも風雨の夜ハ海面に数萬の妖火を現するよし。ゆへに此辺、夜船は慎むよし。勝手しらぬ客船など、この鬼火に感ひ苦しむこと有と云。(下略)

これは島原での舟遊びの際に聞いた話の紹介である。また、次にひく雲仙の地獄めぐりでは、案内者の説明を自分なりに面白く作りかえ、やはり別項を設けて記すのである。

いぎ聞伝ふ地獄廻を嚮導し玉へと乞ければ、若僧の先に立て面白からず教へけるを、おかしくも筆につづりて後の案内とおもへども、多く

ハ小僧の間に合に出ざるのみ。

#### 地獄

若僧の法服を綿褌して前に立バ背後に伴ふて到見るに、抑これこそハ両枝の松とて、一枝は赤く一枝ハ白し。(略) 三津川渡りて、こゝハ無益成、忘語地獄のおこりこそ、慎み悪き酒店の地獄はひとしほ燃上る、劔の山ハ岩石のつきたつ思ひや邪淫界、地獄を蒸せる廻屋の地獄の砂ハ黄金と見るハ邪見の地ごく也。(略) 中にも兄弟いさかひの地獄のすゑハ合戦の地獄に移るほのをこそ、一しほいたく立にけり。又常張の鏡石、ありとしらずに誅盜の地獄のわざぞおそろしき。乱に及べる悪ざけの飲酒地獄の終には焦熱地獄と誑したる小僧を詰りとひにけり。さればかく谷々隈々より熱湯燃出るを、かくいろくと名を附し也。此熱岩を飛越く至るに、頻に草鞋に温気のこたへるぞ不気味也。又臭気の堪がたきに、手拭にて鼻を掩ひて見廻けり。(下略)

このような手法は、どの紀行文にもあるようなものではなく、むしろ珍しいものと思う。だが、南谿の「東遊記」「西遊記」は、全体がこのような、項目ごとにまとまった小話集となっている。林英存は、部分的にその形式を利用しているのではないかと思う。特に「地獄めぐり」の項などは南谿以上の俗文といってよく、記録的、資料的な紀行文とは、いささか趣を異にする。むしろ、国学者たちが成立させていくような和文の紀行文体とも一線を画する。

#### 四

「西遊記」の影響のもとに、長崎を中心として描いた紀行文の名作として、本作品の特徴のいくつかを見てきた。更に、それらを支える全体の傾向とでもいうべきものをつかむために、24頁以降に全体の行程と、

文化元、八、十七

現広島市

本川町出発

〔今市〕 8 / 18

櫛の浜

岬明神

〔小倉〕 8 / 21

黒崎

小屋の瀬

植木

〔赤間〕 8 / 22

宗像

津屋崎

〔ハモフ〕 8 / 23

箱崎  
(浜男)

博多

福岡

〔太宰府〕 8 / 25

## 行動

何所も海浜の松樹は面白く、詠にあかぬと帆船に登り見渡せば、松頭より華表半腹を現し、次之道は見分されども諸木森々として幾代の緑を合しはいかさま宮地と知れけり。掛取云、岬明神也。「さらば輕舟の速なるを祈誓せん」と裳を把て汀に跳り上り、数十丁の沙原、海風に塵を掃ひ、寄来る浪は玉を磨きて砂石を掘れば頻に五彩の球を弄びけり。水客のならひに、「明神の惜み玉ふ」と物忌して取らしめず。(岬明神・8 / 18)

## 觀察

久七と云を昼所とす。頻に臭氣の觸るに不審せり。漸くさとれるは此辺戸々石炭を焼ことの多きゆへ也。飯など炊しハ臭氣の残り、馴されバ食し難し。下筋ハ俵用ゆれども此あたり尤多し。(小屋の瀬・8 / 21)

## 描写

一の華表は松間を突出し、船人の間懼する玄界灘を遙に見、神門の洲浜には諸国遠郷の族は竹筒を以て神砂を盛り、或ハ蒼潮を浚てひとゑに冥助を渴仰せり。諸市の仮屋つらなり、又木鳩を刻作し、遠人はをもとめて土産ものとす。(箱崎・8 / 23)

## 描写

右に向は既に來し浦山也。左に望バ往古異国の通ひたる日の本の名におふ博多の港は手にとるごとくつゞいて見ゆる。福岡の城楼は雲外に聳へ、夕日の輝きてハ丹城霞の如く、瑞氣は松樹と千歳の色を顯し、靡きつらなる松原に玉の薨あらわれて、恰も画中の思ひをなし、猶も遠人の値遇薄きを惜み、覚えず佳興に愛で、日蘭るぞと打立。(同右)

## 批評

同日、主僧の晨興を慰問せられ、少婢の梅干を持出て態に勧めけり。我儕云、「此程遠路數日、殊更に梅干を徹し來しは当社の拝礼を思ひ謹慎せる也」。主僧答て云る、「元より神靈の愛し玉ふものなれば慎て食せらるべし」といへり。予同行に云、「水客の梅核を水中に投ぜず、奴婢の芥土に埋て狼にせざるたぐひ、其流俗久し。況や此神を敬崇るもの、神靈の愛し玉ふ所を想ハざらんや。強て試に云バ、平生梅干を嗜むものは廿五日にハ堅く禁じけるハ、全く身を懲して神威に感じ奉る故也。然ば安きを去り難に附かば、平日嗜ものをしてハ廿五日には必禁じ、平生嗜ざる者には廿五日毎に慎て食せよといわく、神靈の遺愛し玉へるを慎思ふと云べし。且銘々の稟得る性質よりしてハ嗜欲おのゝ異也。若神靈の愛し玉ふとて



〔原田〕 8 / 26

小河里

〔高良山〕 8 / 27

久留米

〔横溝〕 8 / 28

柳川

瀬高

〔半の町〕 8 / 29  
山鹿

或ハ避け或ハ好むものならば、何ぞ一物にて止べき。徒に口実の細事を以て神に媚ん々ハ不義の道に陥らぬ用心して、神の嫌ひ玉ふことを一ツなりとも穿鑿し行ひを深くせんこそ肝要成べし。思ふに此主僧、梅干好ならん」と微笑せし。(太宰府・8 / 25)

取材 下れは禁に一坊庵あり。住侶に問ひければ、当山の古跡多きなど、舌頭を振り様々物語けれど、後世の附合也と耳にも留ざりけり。弓手に鍼磨村と云。菅公の、行法成就せずして此所へ下り玉ひしに、老姥の谷間に在て鉄棒を磨居せるが、老姥の切磋の功を積て、終にハ細針になすべきに感激し玉ひ、再び山上に挙り昇天の勢ひを得玉ふと云。ケ様の偽説いろく有。(同右)

取材 森を出れば忽ち曠原えいづ。深草茫々として旅魂を動し、やうく半原に及んで芝を折て厩居し、腰より鎖具取出し見遣るうち、草刈男の来りて火を乞けるを相手とし、例の長問答を初めけり。此所を小河里の原と云。東西南北數十丁に眼を迷し、たゞ秋草茫々として田圃としては更になしと云。過來し小河里村ハ田水不便にて、隣邑三ヶ村より水手を引ゆへに、此原の肥草をば其村々刈取らるよし。又当国のうち此あたり近きに、対州公の御領一万石あると云、いかゞなるや。しばらく記して覺とす。又老農に向ひ、作業を尋識るに、下百姓など此辺にてハ二三丁の米田を作るといふ。中分ハ六七丁、拾丁に余るは上民なるよし。畠作は少しき方にて、稲田ハ所によりてハ漸く一作を捨作りにせるなど云。しかし是も同じ国のうちにも色々有べし。されど人民よりは土地の寛裕なること押して計り知るべし。故国の郡村、下百姓など大槩丁にハ不足のよし。上田ハ稻草等の手入も少きゆへ少し余分も作れる歟。国風にて耕業も遼ふ事あるべし。国民の多寡土地の貧富も有べし。耕作の事は道同じからざれば、しるて謀難し。(小河里・8 / 26)

取材 境内を駈廻るに小堂有て、頻に鉦鼓の響に至り見れば、常念佛堂也。(中略) 禿翁二人あつて香を供せり。一人に向ひ例の問答をしかけしに聲者成ぞおかし。(高良山・8 / 27)

取材 且当社は武内大臣御魂也と萬人多く渴仰せり。此大臣、玉垂の神号有もいまだ知らず。或云、高良玉長命と称するハ藤大臣ノ連保の御神号也と云々。此ハ神武の朝に仕玉ひ武内大臣とハ年数異也。何れか審にせざれども、当社の宮古記も有べければ、しるて研窮せず、識者に問べし。(同右)

觀察 嶋原領十里余、長崎え出るまでハ坂道石土にて足を蹴敗る程也。草鞋も早く損す。田圃小石多く、小石を畳揚て畔境を

〔新町〕 8 / 30

山鹿

〔熊本〕 9 / 1

〔高橋〕 9 / 2

〔島原〕 9 / 3

雲仙

〔千々輪〕 9 / 4  
会津

なせり。琉球芋を作る。(新町・8/29)

苦難 同夜すでに燭を挙げれども雨の降やまず。黄昏々風吹出しに、初更に及ていよ／＼強く、五更に到り甚く、風雨の音ハ軒端を震ひ、屋棟を吹散し、里人は互に叫喚て狼狽せり。我儕ハ棚から落し蓆の如く、笈荷を片寄て惘然として夜を明し、翌朝風ハやミしかども小雨は半合を出て歇ぬ。同所少しづゝの損じハあれども、倒屋の沙汰もなし。郷老のいひし、廿年にも覚ぬ大風のよし。日を経て諸方のやうすを聞に(後略)。晦日。かねて阿蘇登山と志しけれど、此大風に鋭気を挫かれ、その上道路の損じ、川筋の深浅も計りがたく、いろ／＼評議しけれども心残して止ぬ。同所山鹿の驛え立もどり、熊本さして急ぬ。且、聞伝し阿蘇山の官居、荒増を記し後遊の案内になすと云々。(同右)

## 資料 阿蘇山

肥後街道、山鹿の宿より分れ、一り新町、是より二り石淵にて清水道と尋ね、一りにて清水、こゝにて平川越を問ひ、二りすぐれば平川也。(略)又、雨中は山鳴、谷震ひてなか／＼登ルべからず。俗にこれを御山のあれといへり。猶「西遊記」「里人談」などにも委しく記せり。「銀台遺事」に神代よりの古跡にて大宮司は由緒ある家柄のよしへり。(略)桜の林を過て枯木町、こゝより杉林え出づ。左右玉土手、四り半にて隈本城也。此杉林驛道、幅広きこと拾五間、大道直して豊後鶴崎迄三十余里の街道□と云。(略)これら古清正公より四達の驛道、或は三舎、或は六里のうちハ数尋の堀割道也。全く軍旅の備なるよし。恰も堀下を行に似たり。前路の一脈を目撃するのミ、側目を得ず。田圃は頭上より高く、要害堅固の爲とは成べし。山鹿より熊本えの道こそ大道糸を引に異ならず。(同右)

描写 流石は城下の風俗にて旅人に馴ける有様、宅簀打寄て款待しぬ。夜に入て「夜市の一覧せん」とて、家僮に誘れ馳廻り見るに市丁縦横に限なく、戸々に點せる懸燈ハ銀河一色の天を願しぬ。また「当市ハ浴室の構まされる」と聞しかバ、衛湯と懸燈有しに立寄見れば、戸棚ハ地黒に塗、それに千鳥を蒔絵し、湯壺も広く、前にハ燭台をたて、堀にハ懸燈をならべ甚全備せり。男女人込にて市中より貧富の差別なく自宅の洗湯を減じ入浴するよし。同職十七ヶ所と云。夏分ハ五六の際、焼止むよし。四月七月比、湯銭短銭にて六丸銭四貫余もあり。寒節は同短銅にて七拾目余有。銀に直し五拾目余なり。旅亭も、「御城と湯屋とは熊本の名物也」と自慢顔也。(熊本・9/1)

批評 市丁一見し、元坪井町布屋甚次郎姓永山豪家也。庭内に天満宮を鎮座しめけり。尋いたりければ別門を抜き入ぬ。又中門をくぐり、左右の庭面、いわゆる名山の縮景、巨木巨石海内の珍品を集め、趣き見尽し難し。(略)庭樹に交へ石燈爐数多あり。中にも到て古物有よし、いろ／＼の形あり。長袖能舞多銭能賣ふならひにて、富有の規模は見へけれども、雅趣の

有喜	江の浦	〔矢上〕	9 / 5	〔長崎〕	9 / 10	時津	〔園木〕	9 / 11	嬉野	〔武雄〕	9 / 12	小田	佐賀	〔蓮池〕	9 / 13	久留米	〔高良山〕	9 / 14	吉井	把木	〔永谷〕	9 / 15	日田	伏木	守実
----	-----	------	-------	------	--------	----	------	--------	----	------	--------	----	----	------	--------	-----	-------	--------	----	----	------	--------	----	----	----

眺望を失ひぬるハ、主人の心も押計らるやうに覚ぬ。(同右)

取材 宿主、意ある男にて雑談おもしろく、いろ／＼の物語のうちに、「当国にも近年官より砂糖を作らしめ、其場所、諸道具、よろづ御力入しかども功ならず、中道に廃せり。損失少からず」と云。(同右)

行動 六日の朝はとく目の覚ければ、□に駈出て四方の気色を見渡せば(長崎・9/6)

行動 我輩ハ此程養ひおきし新足なれば、時津までの三りをば犬走りに到ぬ。(時津・9/10)

觀察 家路いくつか経て進み行ば、向より行隊正しく、筑州の国老黒田源左衛門と掛札有、続て諸士雁行せり。崎陽来船の発向也。是より兩三日は右出張の族多し。(嬉野・9/11)

行動 朝の間斗ハ、氣も剛く口の軽きに、休もなく四里の道を凌ぎぬれば(小田・9/12)

談笑 頓てこゝを立いで、数十丁にてカウヤベタと云。黄昏に夕顔の宿ならで葎の舎に優き女房の住めるに、煙管の火を心よく所望し、「是も他生の縁ならめ」と出行。「実にも嬋娟のもの也」と云ば、同行の「笠を忘れし」と十歩の外に立かへりければ、「執心の残りし」と颯りつゝ、「粟飯を炊く気色やさしく見えし」と云バ、僕を取妙寺と仇名し、互ニ一興じて行程に、高橋の宿え着。合羽やおしへし浜屋源助え宿す。この女房もまた窈窕成しかば、「いよく最妙」と一笑せり。

(小田・9/12)

觀察 当市、横幅ハなけれども、往来通町の長きことは、二りもつゞきたるやう也。(佐賀・9/12)

同行 十四日、曇。まだほのぐらきに立出ければ、やう／＼一り余を来て善導寺前にて戸々に扉を開けり。同行、多く早出を好み、僕はいつも寝たらず。毎朝あまりの早出しければ、面兵を張て不興し、言葉だゝかひしけれども、向ふハ勢も揃ひ、其うへ彼に利あり、こなたハ援なく「勿論、墮弱の癖あり」とひしがれ、後に引従ひて行けば(高良山・9/14)

苦難 同所、家居拾軒斗もあらん。旅中の惡所也。しかれども前途なおさがしく、行暮ぬれば詮方なく、宿所とても無に、浅間なる茅屋に一宿を乞ふ。過し大風雨に前流、家を潰し、下地さへ荒破たるにその防さへまゝなれば、夜半の風は身を切立、葉庭は骨に綻し、素り浴桶とてもなく、やう／＼小盥の底に少し計の湯水に足脛を淫し、せまき所に膝をよせ脚をもたせて安眠もやらず。樹々の揺動し、前流溜々として腸を悩し、物すごき有様、一夜を明しかねけり。(永谷・9/14)

危険 十五日。秋の夜長く待佗、やう／＼と明行まゝに立出ぬれど、朝霧ふかく咫尺も見がたけれど、日はいつよりも高く上りぬ。谷川のほとりを伝ひ歩むに、元道を水損し人跡定かならず。岩により木の根を取り、一步のふみ誤なバ洩底魚腹も免

〔二ッ戸〕	9 / 16
羅漢寺	
〔樋田〕	9 / 17
〔宇佐〕	9 / 18
四日市	
松江	
〔椎田〕	9 / 19
神田	
小倉	
〔下関〕	9 / 21
長府	
〔石炭〕	9 / 22
〔小河里〕	9 / 23
〔戸田〕	9 / 24
〔高森〕	9 / 25
〔玖波〕	9 / 26
広島	

れがたく、戦々慄々として進退膽を寒し、人を力に強き顔して、先達するもありたけの気丈を出しけり。やうく難所を凌、一り余を来りて、霧間に船を呼、向え渉り、岩山を廻り枝川を掲し畔道をたどり日田の里え出て、始て霧も晴れ夜の明しこちせり。旅はういものつらひものとぞ云る。此永谷には跡先に無、ミなく難儀にぞ思ひぬ。永谷より前に、よき往還あるよし、跡にて人のおしへけり。我等の通しハ小道といひ、里人のほか旅人のかよひ路にあらず。そのうへ水損後は殊に荒ける道なるを、しらぬことゝて無面目に行かゝり不覚の難儀に値ぬ（永谷・9 / 15）

行動 程近しと鞭を加て下りかゝれば、絶壁をかけ出し足もためらわず、忽ち家路えいで、所は跡田村を跡になし河を越れば羅漢山え猶八丁の登なり。（羅漢寺・9 / 16）

行動 曾て足力の続くだけは翔廻り、応接の暇なく勝景に心酔し疲も忘れ、夫々降、龍川を渉りて古羅漢え攀登バ、荊棘、道を遮り、鹿ならで来るもの外ならじ。石埤、所々に安置し幽遠の気色也。（同右）

取材 当宮の神會、年中の行事、他社にこへ恒例の観式多く、社記等に見ゆといへども、長々しければこゝに贅ず。（宇佐・9 / 18）

批評 同行の云、「此地の婦人は、生質艶美なるよし。婢女迄も醜婦ハ少しと聞及」と云り。拙云く「人物も土地の気姓によりて稟得る所、甲乙善惡も有べし。去ながら繁昌の地に生るものは氏より生立と云諺も有、品形よく人馴てより、自然と能とおもふもありしも、此地のミにハかざるまじ」と口答して一興せり。（下関・9 / 19）

行動 廿六日、晴。いまだほのぐらきに、主家の内儀を起し、朝飯をいらち、松明をとりて出行せり。（玖波・9 / 26）

さまざまな記事を、日時に従って並べてみた。以下、それに沿って述べたい。

八月十七日に広島城下の本川<sup>ほんかわ</sup>を舟出し、九月二十六日に陸路から帰宅する、ひと月と少しの旅である。

全体を通じてまず言えるのは、やはり二十二才の若さからか、大變に行動が積極的かつ精力的であるということだろう。「行動」と仮に記した項目を見られたい。船では帆棚に登り、浜へには跳り上がり、朝起きると駆出し、とにかく、馳廻る・かけ回るといった表現が頻出する。初め、乗馬している可能性も考えたが、高良山や羅漢山でも駆回るので、おそらく、徒歩であろう。これも、どの紀行にでも出る常套句といったものではない。やはり、現実の反映であると思う。

また、「筑前国統風土記」「西遊記」等の資料で下調べはしていても、作者は現地の人々との会話による取材を、決しておろそかにはしていない。そうやって得た記事の取捨選択をする見識や、自己の見解も、一応は有している。「取材」と記した項目を見られたい。八月二十六日、小河里<sup>おがうち</sup>の野中では、草刈男と「例の長問答」と記す会話をこなして、土地の百姓たちの生活を考察し、自国の実情と比較する。翌二十七日にも、高良山で僧に話しかけたところ、この僧は耳が聞こえなかったので断念するが、やはり「例の問答」と表現している。

自己の見識について見よう。たとえば八月二十五日の太宰府で、天拝山の麓の庵の僧に聞いた話を「後世の附会也」として退ける。(ただし、「耳にも留」なかったにしては、すぐそのあとで、鍼磨<sup>はりす</sup>村の話を「偽説」と断わりつつ、紹介するが。)その他、八月二十七日の高良山の神体について、詳しいことは「識者に問べし」、九月十八日の宇佐八幡宮について社記の記事を「長々しければ」と省略するなど、紀行文制

作における一つの姿勢というものを、おぼろげながら作者が有しているように見うけるのである。

もっとも、こういった紀行文の、文学的にはおそらくかなり素人といっている作者の(和歌も俳句も漢詩も、この紀行文中で作者は全く作っていない)文学的手腕についての評価は、困難である。たとえば、「觀察」なる項目を仮に附した記事の数々を見られたい。八月二十一日の木屋の瀬での、食物にまでしみこむ石炭の臭い、八月二十九日の、嶋原あたりの道は石が多く、草鞋も早くいたむという指摘、長崎からの帰途の九月十一日の嬉野で、長崎行の大名の行列を見ること、あるいは九月十二日の佐賀の町が、横巾はないが長いという記述、これらは私の感覚では、いずれも紀行文作家として必要な、新鮮な感覚に見えるのだが、実はさして評価するまでもない、単に素直な表現にすぎぬのかもしれない。また、たとえば、同行者との談笑があったかと思えばいさかいがあり、嵐の夜の一夜が八月三十日にあったかと思えば、熊本・長崎の平和さと華やかさが続き、再び九月十四日、宇佐への道で、貧しい山奥の一夜・危険な山道が登場する、芭蕉の「おくのほそ道」もどきの効果的な変化と推移にみちた構成を見ていると、旅の実態がそもそもこうであるからこうなるのか、あるいはそうであったとしても、そういう記事を的確にひろいあげてゆくこの作者には、やはり一種の紀行文作家としての才能があったのか、判断しがたくなるのである。作者は、八月三十日の嵐のため、予定していた阿蘇登山を断念し、阿蘇に関する部分を資料のみで記述する際、その部分の末尾を、巧みに現実の旅の部分へと融合させていっており、こういう手腕を見ていると、あながち、実態を素直に描いたことによる偶然の効果のみとは言いきれない。

しかし、これらの引用された文章からも明らかなように、作者の個性

は決してそれほど強いものではない。「批評」と附した項目にみるような種々の見解にしても、概ね健全で平凡かつ常識的である。文体もまた、それにふさわしい。そして私は、それは近世の紀行文作家にとって、良い条件であったのだと思う。見聞した事実を過度に色づけしたり、複雑に屈折させたりすることなく、いわば素材を生かして表現する紀行文、感じやすくゆたかではあるが、素直な性格によって記される、わかりやすく正確で、しかも面白い情報源としての紀行文が、一般的には望まれる傾向があったと思う。ただ、林英存が南谿の「東遊記」あるいは「西遊記」を愛読していたことを考えると、記事の選択、文体などの感覚は、まったく白紙というわけではなく、南谿の作品から、およその基準は学んではいたのであろう。

作者の創作意識等の検討はなお今後に残すとしても、いずれにせよ、結果として、『筑紫道草』は、当時の九州各地の様をよく伝え、全体も変化に富んで読みやすい、すぐれた紀行文となっている。作者の出自や生涯は先述の通り不明だが、五十に近く、病を得て職を全うできない折、「駆け回り」「馳せ回る」二十二才の折の紀行文を目にし、当時の旅を、時代や異国への新鮮な興味にみちていたかつての自分の姿を、文中に見たとき、子孫にそれを伝え、見せるために清書し直した作者の気持は、理解できる気がする。

最後に、余談めくが、近年各地で地方史の編纂が盛んで、私のように紀行文の調査をしている者は、その綿密な研究に恩恵を蒙ることが甚だ多い。だが、この紀行文のような作品を読むと、逆に、地方史に利用して頂きたい記事が頻出する。九月一日の熊本での風呂屋の記事も面白い。八月二十三日の箱崎宮の描写など、現在の工場や高速道路からは到底うかがえない、失われた情景である。長崎にしても、この時に林英存

が見た町は、今は、残らない。こういった、すぐれた紀行文による、昔の都会の描写などが地方史の中により利用されればと思う。

## 註

- 1 「語文研究」63号所収。
- 2 「近世再考——地方の視点から——」（塚本学氏 日本エディタースクール出版部）所収の「江戸時代における「夷」観念について」によると、当時の儒者の意識にこの発想の基盤となるものは存するようである。
- 3 昭和54年、教育社歴史新書。
- 4 昭和49年、伝統と現代社刊。
- 5 紙数の関係で、ここでは熊本・岩戸山観音・嬉野にあたる部分のみを「西遊記」から引いておく。「足利の末にや、太閤の始にや当りけん、川上より梶の流れ来れるをふと見附て、此山奥に人住けりと知りて、やうく尋ね入て、始て此五ヶ村の人此世に通ぜり。彼方の人世間へ出初て人交せし事は、元和、寛永のころにもや。此あたりにては、隈本名家なれば、此手に属したきよし申立て、公にも其由聞居られ、肥後の支配と仕給ふ。されど本国の外なれば、何方の領分といふにもあらで、唯支配といふのみなり。」（「西遊記」続編卷之二 ○五ヶ邑）「天明癸卯の春（略）、蓋をひらけば小き像を入れたり。像は陶器のやうにも見ゆ。（略）すなはち時習館に下し給ふ。館の学士打集りて其事を書記し、且其像を模写し、石にあり、紙に写し、そこゝもてはやしぬ。」（同、卷之一 ○檜垣女）、「肥前の国嬉し野を通れるころは日影もまだ高かりしかど、此里にきき温泉ありと聞しかば、先宿を求めて、夫をも心見んと、賤しき伏屋に宿りぬ。都て民屋なれば、茅の軒端いといふせし。誠に聞し如く、温泉は勝れたり。都近きに有らば、いかばかり賑はしく繁昌ならんに、斯辺鄙なれば、其事もあらず、惜むべし。」（同、続編卷三 ○嬉し野）。
- 6 引用部分と原文をあげる。「当社ハ神后、応神天皇を御産まし／＼ける所にて、分てめでたき神地なれば、其古は大内の御尊敬も格別なりしに、物換り星移て其かゝのことは識ものさへ稀也。瑞籬のうちに神木有。槐なり。安産の咒木なればとて、其東の枝に取すがらせ玉ひ、たやすく御産ましませしとかや。故に大内の后妃を始め御産平安の御祈りにハ、此槐を御衣木に用られし也。然

るに此こと中絶て止ぬと也。平産に幸ひ有木なればとて、子安の木と名づく。  
 (貝原好古の書記し、もろこしの子母秘録と云医書に、槐樹東に引枝を取て孕婦をして手にこれを抱しむれば即生れやすしと云し。)(宇彌八幡宮・8/23)、「皇后御産の時、産の宮の槐に取すがりて、応神天皇をうみ給ひけると、慈鎮和尚の愚管抄に見えたり。さればにや、此御社の側に、今も槐の木有て、壇を築、めぐりに垣ゆひまはせり。是皇后の取すがらせ給ひし木の実をうへ伝へたりと云。国俗には、此木を子安の木と称して、臨産の婦人は是を取用ひて、平産をもとむ。按るに、本草に槐木の難産を治する事あり。又子母秘録といへる唐土の医書に、槐樹の東に引ける枝を取て、孕婦の手に把しむれば、則生れ易しと見えたり。」(「筑前国統風土記」卷之十八、貝原篤信選定、貝原好古編録、竹田定直校正、宝永七年成)。

7 「諸国里人談」(菊岡沾涼 寛保三刊)。

8 高木紫溟編、寛政二年刊。肥後藩主細川重賢の伝記である。「肥後文献叢書」一に所収。